

くらしまプルーン

育成者：倉島貞子

実生

来歴：「ローブドサーゼン」

育成地：長野県長野市若穂牛島506

と「プレジデント」の交雑

特性

■栽培特性

樹勢は若木の間はやや強いが、樹齢を経るに伴いしだいに落ち着いてくる。樹の大きさはやや大きい。枝の発生、花束状短果枝の着生ともやや多く、枝のはげ上がりは少ない。若木の間は直立するが、結実が始まると開張性を示す。主枝・亜主枝の誘引を行い、適正な樹形構成に心掛ける必要がある。整枝剪定は「シュガー」に準じて行う。

開花期は育成地（長野県長野市）で4月中・下旬であり、プルーンの品種の中では比較的早い。自家不和合性のため、授粉樹を混植する。授粉樹としては、交雑和合性で開花期が同じである「シュガー」や「トレジディ」などが適当である。開花期間中に毛ばたき等で交互授粉することにより結実が安定する。異常花、生理的落果は比較的少ない。裂果の発生は特に少ない。

成熟日数は満開後140日前後である。収穫期は育成地で8月下旬～9月上旬であり、中生種としての位置付けである。「ペイラー」よりも1週間程度早い。収穫期には果皮が青紫色となる。適期以前に収穫すると酸味が強く品質的にやや劣る。

■果実特性

果実重は70g程度で玉揃いは良い。果形は楕円形である。果皮の着色は良好で、全面青紫色となる。しかし、着色先行型であるため、早期に収穫すると果肉が硬く、成熟に至っていないため食味が劣る。果粉の多少は中位で、果面のサビは少し発生するが、外観は良好である。縫合線の溝の深さは中程度である。果実内の空洞は中で、核と果肉の粘離は離である。

果肉は黄褐色で、肉質は中である。糖度は屈折計示度で15～16%程度で、酸味はpH3.7程度でやや多く、食味は中程度である。日持ち性は早生種に比べやや優れる。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

病害の発生は比較的少ないが、不受精果を摘果しない場合には灰星病の発生源になりやすい（不受精果は収穫期まで落果しないので、摘果時に取り除く）。

授粉樹を混植して結実確保に努める。ただし、着果量が多いとやや小果となる傾向があるので、適正な着果量とする。本品種は着色先行型であるので、適熟果の収穫に努める。未熟果は食味がやや劣るので早採りには注意し、果実硬度がある程度低下してから収穫する。

寒地では主幹部に凍害を受け易いので、ワラ巻きや白塗剤の塗布で予防する。

■地域適応性

全国のプルーン栽培地域において栽培が可能であり、適応性は十分あると思われる。プルーンは他の果樹に比べ開花時期が早いので、凍霜害を受けやすい地域では生産が不安定になりやすい。

（堀 茂樹）